
川崎 正志 (かわさき まさし)



【書名】 ウツぶん

【著者】 藤田紘一郎

【発行】 講談社 (講談社文庫)

皆さんは、あの「もの」が流れる川の水で歯を磨けますか？ 超清潔志向社会に警鐘を鳴らし続ける著者が、この世で最も汚いものの1つと思われるあの「もの」についてその思いの丈を綴った本です。学校でその「もの」を排出することができない小学生、木が人間にその「もの」を催させるなど。一部著者の独断と思われることも含まれていますが、目からう〇こ、じゃなくてうろこが落ちること間違いありません。同著者の『清潔はビョーキだ』(朝日文庫)もお勧めします。

【書名】 くさいはうまい

【著者】 小泉武夫

【発行】 文藝春秋 (文春文庫)

著者が食した臭い食べ物記です。カブロン酸臭がしそうな山羊料理。カラスがなぜ増えすぎるのか、その理由の1つがわかるカラスの肉の味。内臓を削り貫いたアザラシの体内で発酵させた海鳥とその食べ方。殺菌をせずに缶詰内で発酵させた魚とその缶詰の開け方など恐ろしい話が満載です。ただ、この本で1つ残念なのは、本に鼻を近づけても何の匂いもしないことです。

【書名】 決断力

【著者】 羽生善治

【発行】 角川書店 (角川ONEテーマ21)

「直感の7割は正しい。」著者(将棋棋士)は、「経験で培ったことが脳の無意識の領域に詰まっており、それをもとに浮かび上がってくるものが直感である。」と言っています。過日著者は「経験で直観力を鍛える。」とも語っていました。しかし、人生において「これだ」と思ったことの7割も正しかったとは思えません。研究においては直感がことごとくはずれています。そうですね、正しかった直感が2つあります。うちの奥さんとうちの猫との出会いです。(いっしょにするなど怒られました。)

【書名】屋根裏の散歩者

【著者】江戸川乱歩

【発行】春陽堂書店（江戸川乱歩文庫）、角川書店（角川ホラー文庫）ほか
中学生の頃、江戸川乱歩の「少年探偵団シリーズ」が好きでした。「明智小五郎」、「怪人二十面相」、「少年探偵団」、「小林少年」これらに胸がときめきました。しかし、「少年探偵団シリーズ」は乱歩が子供向けに書いた本です。本当の乱歩の作品は妖美でストーリーチック、グロテスクそしてサディスティックな世界へとあなたをいざないます。同著者の『人間椅子』、『地獄の道化師』もお勧めです。

【書名】男は匂いで選びなさい

【著者】山元大輔

【発行】ベストセラーズ（ベスト新書）

匂わないが感じる物質が人間にはあります。また、男女の相性は血液型では決まりません。何で決まるかというところ…。男性の皆さん、この本を読んでちょっと知的な会話で女性を魅了しましょう。女性の皆さん、注意しましょう。この本に限らず本の受け売り話をして得意がっているような男には（ん、僕？）。

【書名】大学教授コテンパン・ジョーク集

【著者】坂井博通

【発行】中央公論新社（中公新書ラクレ）

「大学の先生はぬるま湯につかりながら自分の領域をなかなか出ることはないのです」。確かに。「大学の先生は論文を書く人が多い。書かない人も多い。書けない人はもっと多い」。います。「理系の先生には、理論はあるが議論はない。文系の先生には、議論はあるが理論はない」。わかります。一部学生さんには読んで欲しくない箇所がある本です。

【書名】猫はすごい

【著者】山根明弘

【発行】朝日新書

猫は最強のハンター？うちには「美人（ミント）」という名の猫（♀）がいます。ほとんど押入れの中で寝ています。あまりじゃれられません。かりかりを大量に食べ、かつ、すぐにごろつきます。そのため、体にしまりがありませ

ん。しかし、テーブルにシュッと飛び乗ります。ベランダの手すりの上を難なく歩きます。おしりをふりふりしながら階段をたつたつたと降ります。フリーザーから鶏肉を取り出すと、どこからともなく現れます。真っ暗な中でもトイレを失敗しません。たまにしか来訪しない奥さんの両親を覚えています。そんな猫のすごさがわかる1冊だニャ。